

山川良に関する研究

——男爵山川健次郎長男洵の妻の記録——

遠藤由紀子

Yoshi, who was Married to the Eldest Son Makoto of Kenjiro Yamakawa from Aizu

—— The Records of the Yamakawa and Kajii Families since the Meiji Period ——

ENDO Yukiko

Kenjiro Yamakawa of Aizu fought in the Boshin War on the losing side. After the war, he studied abroad at Yale University in the early Meiji era, earning a PhD in physics. Later, he served as president of Tokyo Imperial University and led the education world in the Meiji period. Kenjiro's eldest son Makoto took a wife named Yoshi from the Kajii family of military doctors from Daishouji. According to the "Aizu Zakki" recorded by Yoshi and preserved by her descendants, Kenjiro had informed Yoshi about the history of the Chugoku region and the Aizu clan, the relatives of the Yamakawa family, and his knowledge of waka poetry. The records show that Kenjiro passed on knowledge and education to his eldest son's wife and expected her to support the Yamakawa family. People of Aizu who moved to Tokyo maintained a sense of belonging to Aizu, which helped discipline themselves even after the modern era. Descendants of Yoshi, too, live in modern society with a sense of pride and identification with their ancestor's hometown.

1. はじめに

明治24年(1891)5月、大津事件(湖南事件とも)が起きる。この大津事件の初動対応に宛てられた医師が大津衛戍病院長の梶井恒^{ひさし}であった¹。恒(生没年1848~1923年)は、大聖寺(現石川県加賀市)出身で、明治7年(1874)より陸軍軍医として出仕、明治23年(1890)6月より大津に駐在していた。大津事件の起こった年の瀬、恒は第5子となる次女良^{よし}(1891~1972)に恵まれた。

良は、明治44年(1911)に山川^{まこと}洵(1883~1943)に嫁いだ。洵は東京帝国大学農科

1 襲撃を受けたロシアの皇太子ニコラス=アレキサンドロビッチ(のちの皇帝ニコライ)は随従医官に応急処置を受け、宿泊していた京都の常盤ホテルに戻る。ロシア側はホテルに神戸停泊中の戦艦より医師を呼び、日本側もまた「斯界権威の総派遣」(東京慈恵会医科大学編1965:213)をして対応したが、結局、皇太子はロシア人医師の治療を受けた(沼波1926:26)。

大学を卒業した水産講習所²技師であり³、父は会津藩出身の山川健次郎（1854～1931）⁴であった。

筆者は、幕末期に会津藩家老を輩出した山川家、特に山川家の女性たちに注目して、近代以降の動向の調査を進めている⁵。戊辰戦争で敗北した会津藩出身者が明治期以降にどのように過ごしていたか、特定の人物に注目して調査しているが、山川家は近代教育の進展と皇室に接点のあった一族であり、研究対象として重要であると考えている⁶。

本論文では、山川健次郎の一族の奥を預かっていた良について、調査した。健次郎の家庭生活⁷を知る良について、詳しい経歴が知られておらず、研究として調査されたことはない。

これまで、良に関して一番詳しく書かれているのは『男爵山川先生伝』にある遺族紹介

-
- 2 水産講習所は、明治21年（1888）設立の水産伝習所を改組・改称して、明治30年（1897）に農商務省が発足させた。昭和24年（1949）に東京水産大学となったが、平成15年（2003）に東京商船大学と統合し、東京海洋大学となった。
 - 3 明治43年（1910）より水産講習所技師に就任していた。
 - 4 健次郎は会津開城後、明治4年（1871）にアメリカへ国費留学をし、イェール大学で土木工学を修め帰国、明治21年（1888）、東京帝国大学初の物理学博士号を授与された。のち、明治34年（1901）に東京帝国大学総長となり、九州帝国大学、京都帝国大学の総長を歴任した。明治37年（1904）に貴族院議員に勅撰され、また東宮学問所評議員を勤めた。明治専門学校（現九州工業大学）や武蔵高校など学校の設立にも多く携わった（花見編1939）。
 - 5 幕末明治期の山川家を生きた兄弟姉妹は7人いる。すなわち、長女二葉（1844～1909）、長男浩（1845～1898、旧名大蔵）、次女ミワ（1847～1932）、三女操（1852～1916）、四女常盤（1857～？）、次男健次郎、五女捨松（1860～1919）である。これまでの研究として、①長女二葉に関する論文（遠藤2010「会津藩家老梶原平馬をめぐる女性－山川二葉と水野貞と「仕事」－」（『女性と仕事』昭和女子大学女性文化研究叢書第7集、御茶の水書房）、②次女ミワに関する論文（遠藤2018「会津藩家老山川家の明治期以降の足跡－次女ミワの婚家・桜井家の記録から－」（『女性文化研究所紀要』45号 13～36頁）、③五女捨松に関する論文（遠藤2019「陸軍大将・大山巖に嫁いだ捨松の生涯－日本初の女子留学生から近代国家の貴婦人へ－」（『秋山好古と習志野騎兵旅団』雄山閣出版）がある。他に④長男浩に関する調査（会津若松市歴史資料センターまなべこの歴史文化講座にて報告、共同発表者中野健氏、2018年5月）を進めている。
 - 6 山川健次郎に関しては、遺稿集（山川1937、山川兄弟の従弟にあたる飯沼関弥（会津松平家家令）が中心となり、健次郎の自叙伝や各大学での講演記録がまとめられた。全780頁）や伝記が多数刊行されている。近年でも日記写本の翻刻（尚友倶楽部2014）、国会の施政方針演説（平成30年（2018）1月22日、第196回国会の安倍晋三首相）で紹介されるなど、時代を経て尚、注目されている人物である。
 - 7 平成30年（2018）7月18日に、戊辰150周年の記念事業として、遺族に伝わる健次郎の逸話を残すため「山川健次郎を語り継ぐ鼎談」（出席者服部艶子氏（健次郎孫）、木下健氏（健次郎曾孫）、宗像精氏（顕彰会会長）が実施（司会森武久氏（顕彰会事務局長）、同行青島温子氏（健次郎曾孫））され、同年9月に小冊子が刊行された。

で「(長男洵の) 夫人良子君は石川縣大聖寺前田藩士梶井恒氏の次女にして賢夫人の誉れ高く、先生の夫人柳子君が大正5年逝去の後は舅たる先生の御世話を一手に引き受け、且つ忙しい家庭内外の難事をも立派に処理せられ、その甲斐々々しい働き振りは訪問者の著しく感嘆する所である」(花見編1939:476) という内容であった。

本論文を作成するにあたり、梶井恒の曾孫にあたる梶井英二氏⁸、山川健次郎の曾孫にあたる三木邦夫氏⁹より聞き取りし、史料(資料)を拝借し閲読することができた。良が生まれ育った環境や山川家の家庭生活に関する記録を分析し、良を中心として健次郎の山川家¹⁰が明治期以降にどのように展開していったのか、精査し明らかにしたい。(登場人物について、巻末の家系図を参照されたい)

2. 良の生家・梶井家について

梶井家の初代は五郎右衛門(享保17年(1732)没)で、一家は明治16年(1883)に大聖寺鷹匠町(現石川県加賀市)に移住、代々眼科医を生業とした。行商人に貝殻が原料の目薬の作り方を教わったのが切掛であったと伝わっている(梶井英二氏所蔵資料「梶井家の系譜」¹¹)。

7代目となる恒もまた医師を志し、明治元年(1868)4月より華岡準平(青洲の娘婿)に従い漢方医学外科修行、明治2年(1896)



写真1：明治33年(1900)の梶井家
(『わが半生』口絵より転載)(後列左より貞吉(次男)、剛(三男)。前列左より滋(四男)、良(次女)、千鶴(五男篤を抱く)、愛(長女)、春(三女))

-
- 8 昭和25年(1950)愛知県名古屋生まれ。梶井恒の三男剛(通信省工務局長など歴任、詳しくは後述)の長男健一(日本銀行を経て名古屋鉄道社長・会長を歴任)の次男。平成30年(2018)7月20日三軒茶屋、平成31年(2019)3月18日池袋、令和元年(2019)10月24日新宿にて聞き取りを行った。
- 9 昭和23年(1948)東京都生まれ。山川健次郎の長男洵の三女教子(中央大学教授の三木忠夫夫人)の長男。晩年の良は三木家で過ごしていた。令和元年(2019)6月18日、10月25日に練馬にて聞き取りを行った。
- 10 幕末の山川家は長男浩が家督を継いだ。浩は戊辰戦争で家老職を拝命、会津開城後、明治3年(1870)斗南藩の大参事を勤めた。廃藩置県後は陸軍に出仕し、陸軍少将となった。明治31年(1898)1月26日に佐賀の乱・西南戦争の功績により、山川家は男爵家となる。次男である健次郎は、結婚により分家した(分家は大正4年(1915)12月に男爵家となる)。
- 11 「梶井英二氏所蔵資料」は、恒の次男貞吉の長男直が調査した「梶井家の系譜」「梶井家の歴史」「梶井恒略歴」の3点である。調査は6代目少澤(明治20年(1887)没)が記した由緒書に拠るものである。昭和63年(1988)夏に、直は恒の三男剛の長男健一宛に本資料を送っており、以降、健一の次男英二氏が保管していた。

8月より山城国西京新宮涼民に従い洋法医学内科修行、明治3年(1897)10月より東京医学校にて洋法医学内科修行をした(「梶井家の歴史」)。明治7年(1874)より陸軍軍医副本病院に配属され、近衛歩兵、東京鎮台歩兵などの医官¹²を経て、明治23年(1890)6月に大津陸軍病院長に就任した(「梶井恒略歴」)。

恒は6男4女¹³に恵まれたが、明治24年(1891)の12月4日に誕生したのが次女良であった。大津には約5年間駐在しており、良は大津で生まれたと思われる。良の4歳年上の兄剛(1887~1976)は『わが半生』(1968年刊)¹⁴を著しており、それによると、剛は大津で小学校4年生まで過ごし、恒の転勤により金沢に一年間滞在、広島に移った(梶井1968:4~5)。恒は転勤が多く、家族もそれに伴い転々としたことが分かる。広島で、剛は軍人の子弟が入る広島済美学校に通い、明治33年(1900)4月に広島県立第一中学校へ入学した。広島では「屋敷が広くて、裏にずっと畑がありました」(梶井1968:6)との回想があり、広島時代の梶井家は大きな屋敷で生活していたことが分かる。良の年齢を考えると、広島の小学校に通っていたと考えられるが、剛の回想には登場しない。

また、剛は「私は乱暴者で喧嘩ばかりしていました。兄弟喧嘩をすると、母がとんでくるのですが、やっているのを見るといつでも一方は私で、あとが兄弟のうちのどれかだものですから、「おまえは相手変われど主変わらず、いつも喧嘩の主だ」といって叱られました。生存競争上、よほどファイトを燃やして、喧嘩ばかりしていたのでしょう」(梶井1968:5~6)と回想する。兄弟喧嘩の相手が良の時があったかは分からないが、広島の梶井家は、剛や良の兄弟が次々と誕生した記録があるので、賑やかであったと思われる。(写真1)

明治34年(1901)、恒は姫路の軍医部長に異動となる。この時、剛と長兄の貞吉は転校を避け、広島第一中学の教師で同郷の岩崎氏に預けられた(梶井1968:7)。良や他の兄

12 詳しくは、近衛歩兵第1連隊第1大隊医官心得・本病院第2課兼務(明治11年(1878))、東京鎮台歩兵第2連隊第3大隊医官(明治13年(1880))、第2軍官派出教導団生徒召募検査医官、仙台陸軍病院課僚(明治16年(1883))であった(「梶井恒略歴」)。

13 明治8年(1875)に千鶴(ちづる)(ちづとも、九谷焼の陶芸家竹内吟秋(本名源三郎)の長女、大聖寺出身、安政5年(1858)生)と結婚した。梶井家の戸籍(梶井英二氏所蔵、平成19年文京区より取得)によると、長男は早世し、長女愛(明治14年(1881)生)、次男貞吉(明治18年(1885)生)、三男剛(明治20年(1888)生)、四男滋(明治23年(1890)生)、次女良(明治24年(1891)生)、三女春(明治27年(1894)生)、五男篤(明治31年(1898)生)、六男豊(明治33年(1900)生)、四女花(明治40年(1907)生)とある。貞吉が嫡子となった。

14 剛は、通信省工務局長、日本電気社長、電気通信協会設立などを経て、日本電信電話公社総裁、海外電気通信協会会長、FM東京代表取締役、東海大学初代学長などを歴任した。通信省時代に海底ケーブルを利用した長距離電話の実用化に貢献したことで知られ、日本の電気通信の黎明期を支えた。昭和43年(1968)4月に自伝を上梓するが、あとがきに謝辞として校正は桜井懋(健次郎甥)が勤めたとあった。

弟姉妹は両親に同行したと思われるが、はっきりとした記録はない。姫路を経て、明治36年(1903)6月に恒は休職となり、東京へ移った。

3. 梶井良と山川洵の結婚

東京での梶井家は、小石川の伝通院前の安藤坂(現文京区春日)に屋敷を構えた。ちなみに、この頃の山川健次郎の屋敷もまた伝通院から程近い初音町(現文京区小石川)にあった¹⁵。

良の兄たちは第一高等学校に入学し、貞吉は三部(医科)、剛は二部(理工科)に進み、良は小石川に在る東京府立第二高等女学校(現都立竹早高校)に通った(帝国秘密探偵社1930:49)。良は20歳の時、山川洵と結婚する。二人がどうして結婚に至ったのかの記録はなく、孫にあたる三木邦夫氏、また剛の孫にあたる梶井英二氏にも伝わっていなかった。



写真2：明治32年(1899)12月17日の山川家(『吾亦紅』口絵より転載左から佐代長女、照子(三女)、卿、洵(長男)、健次郎、憲(三男)、建(四男))

梶井家と山川家は、東京での住居が至極近隣であったが、両家の人脈を探ってみると2点の接点が見えた。1点目は陸軍での人脈である。良の父恒と洵の伯父浩は同時期に陸軍に出仕しており、洵の従姉ヤエ¹⁶は、陸軍軍医の鶴田禎次郎(1866～1934)に嫁ぎ、良の長兄貞吉も陸軍軍医であった。2点目は、良の兄剛と洵の従兄^{こるどん}戈登(1886～1910)¹⁷との接点で、二人は第一高等学校二部(理工科)の同期であった。しかも同じく水泳部に所属し、同時期に委員を担当しており交流があった。剛は、戈登について先生からもう教えることがないといわれるほど秀才で、水泳部の合宿でも拾ってきた貝の講義をしてくれた(梶井1968:18～19)と回想している。剛と戈登は一緒に旅行に行った記録もあり、親友であったようである¹⁸。縁談がまとまったことを示すはっきりとした資料はなかったが、梶井家と山川家を繋げる何らかの縁があったのは確かである。

15 明治22年(1889)頃、千円の代金で健次郎が購入した。もとは旗本屋敷で2000坪あり、土蔵3戸、500百坪の池、間数は21もあった(東1986:94～106)。

16 健次郎二姉のミワの次女。ミワは会津藩士桜井政衛に嫁ぎ、明治22年(1889)に長男保彦を戸主として根室の屯田兵村に一家で入植した。明治24年(1891)、ヤエは上京し、健次郎三姉の操の養子となった(遠藤2018)。

17 戈登は生後八ヶ月の時、伯父浩の養子となる。実父は徳力徳治(後山川に改姓、大審院長)、実母は健次郎四姉の常盤で、その三男であった。浩は明治31年(1898)に死去、12歳で養父を失った戈登は家督を相続した。浩夫人仲のもとを離れ、健次郎三姉の操に養育されるが、明治43年(1910)、東京帝国大学在学中に病死する(今田1986:63～68)。

18 第一高等学校3年生の6月、一緒に八幡浜へ出掛けた記録がある(梶井1962:63)。

健次郎の山川家は、明治41年（1908）4月に初音町から池袋（豊島郡巢鴨村大字池袋100番地）に引っ越した。新築した屋敷で、当時は野中の一軒家、場所は巢鴨拘置所の近くにあった。健次郎の三女照子（1898～1990）の回想録『吾亦紅』¹⁹（1986年刊）によると、「池袋の家もだだっぴろく、物理学者の父上のご設計になったもの丈に、耐震、採光、通風を充分考えられていた」（東1986：142）とある。冷房がない時代、風の通り道を十分に考えた構造であった。屋敷の間数の記述はないが、女中部屋でも18畳、2千坪の庭にテニスコートまであった（東1986：135～150）。

池袋の屋敷での健次郎は、夜は18時に就寝し、目覚めは朝3時、読書の時間となり、5時半に入浴（書生が風呂を炊く）、6時にきっちりと食堂に向かい、時計のような毎日であった。朝食はお味噌汁に半熟の玉子が浮き、鮭のかす漬けの小片の焼いたものに焼き海苔、香の物という様子であった（東1986：141）。(写真2)

屋敷には玄関脇の書生部屋にいつも3～4人がおり、木綿の袴をつけ、玄関の取次、男客の給仕、門から玄関までの掃除を担当した。女中は若いのが三人と年寄り（婆や）がおり、爺やもいた。女中は小間使、中働き、下働き（台所働き）と別れ、小間使は15～6歳、中働きは年に制限はなかった。中働きは、20歳前後でも丸まげに結うことで桃割れの小間使と区別していた。小間使と中働きはお上通りするので（健次郎の前に出る）、羽織は許されず、帯は夏冬なくおたいこを高くしょっていた。下働きは、飯炊きで台所にいつもいたので、髪も長持ちのする銀杏返しに結び、寒いときははんでんを着たり自由であった。女中も書生も志願者ばかりで、時には断るのに困るくらいであった（東1986：137～138）という。

明治44年（1911）3月31日、このような大家族の山川家に、長男洵の妻として良が入った。照子は、洵と良の結婚式の前日に両親によばれ、「小姑は鬼千匹といわれる、お前も明日から小姑となるのだからよく心して言動をつつしまねばならない。もし姉上に対し少しの失礼のふるまいがあらば許して家におく事はならぬと厳しく申しつけられた」（東1986：151）という。まだ子どもの照子は、姉の出来ることが嬉しく、お控えの前の廊下を用がないのにぐるぐる歩いた（東1986：151）と残す。結婚式の参列者の記録はない。

良の姑となる健次郎の妻¹⁹（1865～1916）は、唐津藩士丹羽新の次女で、明治14年

19 雑誌『老壯の友』『会津会会報』などに照子が投稿した随筆などを一冊にまとめた。照子は、東京女子師範学校幼稚園から同校小学校、同校高等女学校へ進学し（福岡高等女学校への転校を経て）、大正6年（1917）に東京女子師範学校高等女学校を卒業した。大正8年（1919）4月に東龍太郎（1893～1983）に嫁ぎ、3男2女に恵まれた。東は東京帝国大学医学部を卒業し、同大学教授に就任した。スポーツ医学の先駆けで、日本オリンピック委員長やIOC委員を歴任、昭和34年（1959）～昭和42年（1967）まで東京都知事を務めた。回想録には大阪船場の薬種業を営む東家、それも10人兄弟の長男の嫁となった照子の奮闘ぶりやアメリカ旅日記や日本各地への旅行記などもあり、貴重な回想録である。

(1881)、17歳で健次郎に嫁いでいる。鉦は、宮内省御用掛（昭憲皇太后のフランス語の通訳）をしていた健次郎三姉の操^{みさお}に見出されたようで、たつての望みで山川家に迎えられた。結婚当初は長兄浩らと同居しており²⁰、当時の山川家には健次郎の母、つまり姑にあたる艶（1817～1889）²¹も存命中で、小姑^{みん}²²もいた。

照子は「母とは親子ほども年の違う小姑達は、女ながらに会津の戦争で鍛えられた男勝りの婦人たちで、それぞれ良人を失って生家に戻っていた。……父の一番上の姉などには世捨て人の祖母さえ、気をつかっていた」（東1986：86）と感じていた。また、鉦と姑である艶の関係については、「この難しい家庭に入った母の戸惑いはどんなだったか、想像にもあまりあるが、姑の勝誓院の限りない愛情と理解のもとに、母は成長し人格が築き上げられた」（東1986：87）と語っている。

そのような環境に置かれた鉦は、「誠につつましい賢夫人で、華美な交際社会にはあまり出席せられず、専ら家庭にあつて先生に対する内助と、多くの令息・令嬢の教育に尽くされた」（花見編 1939：456～457）と評され、照子は「母上は誰にも慕われるおやさしさの一面、武士の妻にふさわしい凛とした方でおしかりをうける時はほんとうにこわかった」（東1986：136）と残している。

鉦は書き物が好きであった²³。池袋の屋敷の一番奥まった部屋が健次郎、次の間が鉦の居間で桐の机があり、硯箱やまき紙、葉書などが並んでいた。いつもきちんと丸曲げに結んで²⁴、この机によっていたり、布地を膝につもりものをしていたりした（東1986：136）。

高潔な姑に迎えられた良であった。そのようななか、同年4月、健次郎が九州帝国大学初代総長に就任し、同年9月に鉦、照子たちは福岡に引っ越しとなった。その間、良と洵には長女光子（大正元年（1912）4月生）が誕生した²⁵。

20 いつからか定かではないが、東京での浩邸は牛込区若松町（現新宿区）にあった。のち、二葉邸は小石川区久堅町（現文京区）、操邸は小石川区西江戸川町を経て小石川区同心町（現文京区）に在ったらしいので、これ以降にそれぞれ屋敷を持ったと思われる。

21 艶は西郷近登之の娘で、山川尚江重固（1200石）に20歳で嫁いだ。12人の子に恵まれたが、成長したのは7人であった。尚江は万延元年（1860）に死去、艶は剃髪し勝誓院と号した。

22 長女二葉（会津藩家老梶原平馬に嫁いだが離縁、一人息子景清がいる）、三女操（会津藩士小出光照に嫁いだが佐賀の乱で戦死）のことと思われる。明治14年（1881）当時、すでに次女ミワは桜井政衛、四女常盤は徳力徳治に嫁いでおり、五女捨松はアメリカ留学中であった。

23 鉦は、明治28年（1895）8月より大正4年（1915）まで欠かさず日記をつけていた（花見編 1939：457）。『男爵山川先生伝』に一部日記の抜粋があるが、現在、日記の所在は不明である。

24 池袋の山川家には、初音町に住んでいた頃よりの髪結いお角が三日おきに来ていた。伝通院から徒歩で来ており、一日がかりで夜までゆっくりし、下働きの髪も皆結っていった（東1986：153）。

25 続いて、次女英子（大正3年（1914）11月生）、三女教子（大正10年（1921）5月生）、四女復子（大正12年（1923）12月生）、五女艶子（大正15年（1926）10月生）に恵まれた。五女全員が女子学習院に通った。次女と三女の誕生が離れているのは、洵がアメリカに留学していた時

大正2年(1913)3月、池袋に戻った照子は「池袋の家は大きく兄上の家族も同居し、召使いの数も多く、福岡の生活とは格段の相違だった。……じいやには毎朝池袋の駅までおくってもらった。かえりは女中の誰かが又駅まで時間をはかって出迎えてくれる」(東1986:145)と回想しており、洵の家族も同居していたことと、自由に一人歩きを許されていなかったことが分かる。

厳格な山川家であったが、一同のそろう夕食は楽しかったようで「一日のあった事などを我々兄弟は話し出し、ご両親は我々の親しい友達の名はもとより、その人がらなど皆覚えておしまいになるので、ひとしおのおもしろさだった。父上は昔のお話、今の世の中のことなどをいろいろな話をして下さる。昔の中国のこと、会津の戦争のことなどを伺うのはほんとうにうれしくて、思わず箸のすすみを怠ることもしばしばだった」(東1986:147)とある。

4. 『會津雜記』の筆記

三木邦夫氏より拝借した史料に『會津雜記』(私家版)がある²⁶。和綴じで製本され、ワープロで印字されていた。表紙には「山川健次郎述」となっているが、「山川良筆記」とあり、あとがき(三木教子記名)には以下が記されていた。

本書は母山川良の遺品を復刻したものである。山川良は山川健次郎の長男洵の妻であったが、健次郎の妻御が大正5年逝去の後には山川家の家事一切を取り仕切り、健次郎に仕えた。原文は健次郎が折にふれ語った会津の思い出を書き留めて置いたものを、まとめて和罫紙に筆写したもののようである。その性質上、記事には一貫した筋があるわけではなく、また、判読に苦しむ所もあるが、会津に興味を持たれる方々の参考となれば幸いである。

残念ながら、翻刻し製本した年月が記されていなかったが、三女教子氏²⁷が、良が亡くなった昭和47年(1972)以降に製本したことは分かる。

期があったからと考えられる。

26 かつて、会津若松市立会津図書館か福島県立博物館に寄贈したらしいが、同所には所蔵の明示はなかった。

27 教子氏(生年1921～)は、兵庫県明石市出身の三木忠夫(1916～2009)に嫁いだ。三木家に伝わる逸話では長男一郎が京都帝国大学出身、次男忠夫が東京帝国大学理学部出身であり、特に忠夫は神童と呼ばれていたほどであった。専門は力学(物理学)で熱心な教育者であり、古事記や万葉集を読み、クラシックを嗜む文化人でもあった。結婚当初は、山川家に居候していた。中央大学教授として勤務したが、途中10年間、病気のため休職しており、教子氏は闘病の夫を支えた。三木家は、1男2女(長女治子、次女章子、長男邦夫)に恵まれた。邦夫氏によると、母教子氏もまた、とても厳格であるという。

表1 『會津雜記』にある「御話」の内容

御話	日付	「御話」の内容	備考 (記載の和歌)
1	大正3年ごろ	①会津藩の兵学について	
2		②保科正之の伝記「千歳松」の由来について	和歌1首 (吉川維足作)
3	大正3年7月17日	①会津藩の知行所について	
4		②藩政時代の山川家の家人について	
5	大正4年4月9日	①横山主税常守 (会津藩士) について	
6		②幕末の京都での会津の動向について (長州藩との関係)	
7		③会津開城後の猪苗代謹慎から佐渡までの動向 (奥平謙輔について)	
8	大正4年8月末	八宗 (南都六宗に天台、真言を加えた)、十宗について	和歌2首 (作者不詳)
9	大正4年9月13日	大嘗祭の忌み言葉について	
10	大正4年10月6日	①柴四朗 (会津藩士) の大叔父柴景隆の和歌について	和歌4首 (柴景隆作)
11		②幕末、樺太探検に行った会津藩士について (山川兵衛が参加)	和歌2首 (赤羽二兵衛作)
12		③小山田傳四朗 (会津藩士) の狂歌について	狂歌3首 (小山田傳四朗作)
13	大正5年4月12日	①木村丑徳 (会津藩士) の父兵庫の和歌について	和歌1首 (木村兵庫作)
14		②会津の青木獅子、天寧獅子について	
15		③会津藩の嫡男以外は内職をしていたことについて	
16	大正5年5月	①永縁 = 初音僧正 (平安時代の歌人) について	和歌3首 (初音僧正作)
17		②沢田名垂 (会津藩校日新館和学師範) の狂歌について	狂歌1首 (沢田名垂作)
18		③加判の列 (重臣)、同心について (山川家の場合の例)	
19		④神道について (吉川維足の経歴 (吉田家、吉川神道)、山崎闇斎の垂加神道、両部習合神道、本地垂迹)	
20		⑤土津神社の神主 (桜井豊記) について	
21		⑥今泉常四郎、常五郎、沼澤七郎、武井源三郎 (会津藩士) について	
22		⑦山川家の家人について	
23		⑧会津藩の樺太探検の組織について (山川兵衛の活躍)	
24	大正6年3月	①伯夷・叔竇 (殷代の兄弟) のことを沢田名垂が詠んだ和歌について	和歌1首 (沢田名垂作)
25		②千種有功 (幕末の歌人) の和歌について	和歌2首 (千草有功作)
26		③在原業平の和歌 (伊勢物語より) について	和歌1首 (在原業平作)
27	大正6年6月	①操の洋行のときに押川春流が詠んだ和歌について	和歌1首 (押川春流作)
28		②小川清流 (歌人、小川亮の父) が日光口での戦いの後、山川浩が詠んだ和歌を直した事について	和歌3首 (山川浩作、1首は訂正が入った和歌)
29		③山川家、神尾家、横山家の家系図について	
30		④健次郎の洋行に前後して居た人々の名簿 (46人)	
31	大正8年3月	①会津藩主 (6代~9代、神号で記載) の系譜について	
32		②柳田勝太郎 (会津藩士) が駈御門の警護をしたときの和歌について	和歌1首 (柳田勝太郎作)
33		③蘇秦・張儀の師鬼谷の逸話より真龍寺の住職を鬼谷先生と呼ぶ奥平謙輔について	
34		④梶原家の家系図 (内藤家、横山家と親戚関係) について	
35		⑤難波大助 (虎の門事件) の大逆についての和歌	和歌1首 (山川健次郎作)
36		⑥玉虫左太夫 (仙台藩士) の漢詩	
37		⑦曹操の漢詩	
38	昭和3年	①石黒忠憲 (陸軍軍医) との和歌と誌の交換について	和歌1首 (山川健次郎作)
39		②木本左門 (会津藩士) の和歌について	和歌1首 (木本左門作)

晩年の良は練馬の三木家で過ごしており、良はここで最期を迎えた。教子氏は、平成18年(2006)、九州大学に「山川健次郎初代総長関係資料」を寄贈している²⁸。良が死期を悟ったとき、「(健次郎の)山川家はもうおしまいなので、いろいろ処分してくれと話した」と邦夫氏が聞いているように、三木家では山川家関係の資料を整理する²⁹と共に、良

28 当時九州大学ロンドン事務局長であった山田直氏の夫人迪子氏は健次郎の曾孫(洵の四女復子の娘)である。山田氏を通して、三女教子氏が所蔵していた健次郎関係資料と復子宛の葉書などが寄贈された。『太政官日誌』『十八史略』などの歴史書に加え、徳富猪一郎(蘇峰)書状(大正13年、山川健次郎宛)等15点ある(九州大学NEWSRELEASE(平成18年6月16日))。

29 東京大学理学部1号館前の山川健次郎の胸像はもともと洵の家にあったが、長女光子が嫁いだ福田家より寄贈された。五女艶子氏によると、光子が祖父の遺品を引継ぎ、その次男宏明が東

の筆記の記録を整理・翻刻していた。

『會津雜記』は、1頁が12行×25字で38頁ある（およそ11400字）。書き留めた最初の日付は大正3年（1914）で、1行目に「父上に承りし御話」（以下、「御話」という文言から始まる。「御話」は39話ある。表1は、「御話」の主な内容である³⁰。（表1）

そのなかで、御話5の冒頭には珍しく「母上様、照子様、憲様は京都に、旦那様は湯河原に御出の頃也」と出来事の付け足しがあった。鉦や子どもたち、洵は不在で、健次郎の身の回りは良が世話していたのであろう、その時に聞いた「御話」の筆記であった。その日の御話（5～7）の筆記は6頁に渡り、内容は横山家と山川家の家系図、横山主税常守の話³¹、そして健次郎が会津開城後、猪苗代で謹慎したこと、長州藩士奥平謙輔に世話になり佐渡に行ったこと、上京し前原一誠と交流したこと等の内容であった。健次郎を、少年時代の逸話での登場でも一人称を「父上様」と記していた。

前掲した照子の回想録にも「父上はいろいろな話をしてくださる」とあったが、良の筆記をみると、嫁である良にも多岐にわたる分野の「御話」を語っており、家庭でもある種の講義が繰り広げられていたかのようであった。古代中国の歴史、会津藩の歴史、和歌の嗜み、自分の経験談などを話すことで、山川家の奥を預かる良に対し知識と教養を与え、また藩政時代からの山川家の歴史や家系図を示し、現在の親戚関係についても説明していることが興味深い。家族の留守中、舅として嫁に山川家の親類の話や体験談を話す姿は健次郎の家庭生活のなかでの新しい一面であった。

ところで、『會津雜記』にある日付は、大正3年（1914）から大正8年（1919）、昭和3年（1928）であった。洵の4年間³²のアメリカ留学と重なる時期もある。一方、健次郎は、大正3年（1914）4月に東宮御学問所評議員³³に任命され、8月には京都帝国大学総

京大学に寄贈した（山川健次郎顕彰会編2018：8）とあり、光子も山川家関係の資料の整理に尽くしたことが分かる。胸像には「2006年12月に曾孫福田宏明氏より寄贈」と記名してあった。

30 日付には、年月日の記載がある場合と年と月だけの記載の場合もある。また、日付のない「御話」もあるため、日付のある「御話」に連続して内容を示した。そのなかには、ただ家系図が示してある頁、和歌や漢詩を筆記した頁もあり、良の記憶のためのメモ書きのような意味合いもあったと思われる。また、日付は「御話」を伺ったその日なのか、書き留めたその日なのか不明である。しかし、かなり詳細な内容なので、メモを取りながら聞いており、聞いた日からそう遠くない日に書き留めたと推察する。

31 慶応3年（1867）、パリ万国博覧会の随員として渡欧した横山主税常守（1847～1868）は、健次郎らの従兄であり、惜しくも白河口の戦いで戦死した。遺児又作（後の常道）の説明もしている。

32 洵は、水産講習所の在外研究生として、大正5年（1916）5月16日から渡米し、同年9月～翌年8月までイエール大学、大正6年（1917）9月～大正9年（1920）6月までロックフェラー研究所にて科学を研究し、同年7月24日に帰国した（外務省1941）。

33 東宮御学問所は、裕仁親王（のちの昭和天皇）の教育機関として組織された。東郷平八郎が総裁であり、評議員は軍人がほとんどで、健次郎は唯一の学者であった。活動は、裕仁親王の学

長（東京帝国大学総長兼任）に任命、翌年12月に男爵を授与、大正5年（1916）1月22日、学習院評議会会員に任命された。このようななか、同年3月23日に柳が52歳で死去する。その後、大正6年（1917）3月理化学研究所顧問、大正8年（1919）9月東京帝国大学付属航空研究所所長を経て、翌年、東京帝国大学総長を依願退職した。良にとっては、夫の留学、男爵家叙爵、姑が亡くなる、という大きく環境が変わった時期であった。

5. 姑柳と舅健次郎の死

大正4年（1915）12月1日に健次郎に授爵の恩命があった³⁴。健次郎は貴族院登院中に一報を聞いた。前日の柳の日記（11月30日付）には、宮内省よりフロックコートを着て明日午前九時に出頭せよとの連絡があったが、貴族院の開院式であったため、（東宮御学問所の用事かと思ひ）小笠原^{ながなり}長生³⁵に代理を頼んだとある。しかし、柳は「新聞やより、よひより12時迄引っぱりなしに電話かけて、男爵になったろうと幾度も幾度もきいて困る。何の事か気にかかる」（花見編1939：455）とも記している。

この時、柳はすでに病床に就いていた。同年11月10日の大正天皇御大典に参列のため、京都に行っていた³⁶のであるが、帰京後から体調を崩した。検査の結果、胆石病と分かり、翌年1月より入院となったが、闘病叶わず、亡くなってしまふ。葬儀には大正天皇、祐仁親王より喪中尋ねとして菓子折が下賜された（花見編1939：456）。照子はまだ19歳であり、東京女子師範学校在学中であった。柳の死後、運動会や遠足などの楽しい学校行事は見送るなど相当落ち込んだが、「お淋しそうな父上のお顔を見上げるとふさいでもいられない気になった」（東1986：149）と書いており、健次郎にとっても相当堪えたことが分かる。

『會津雜記』をみると、柳の死後すぐの大正5年（1916）の4月、5月に良が筆記した内容は10頁と多い。このような時でも良が筆記を続けたことは、もちろん健次郎の「御話」があったのであろうし、柳に代わって山川家の家事を取り仕切ることになった良に、沢山の「御話」をした健次郎の姿が見て取れる。それに答えるように、良は小まめに筆記を残した。この頃、洵がアメリカ留学となり夫に関する家事や用事が以前より減ったこともあ

問の時間割や各教科を誰が担当して教えるかの人選であった。人選の動向などは、『男爵山川先生傳』に詳しい。

34 この時、勲功の士として男爵を授爵されたのは 穂積陳重以下、9名であった（花見編1939：454）。

35 1867～1958。海軍中将。東宮御学問所で8年間共に評議員を勤めた。健次郎のことを「フロックコートを着た乃木將軍」、「東郷元帥は武人の典型、山川健次郎は文官の模範的人物」（小笠原1933：135）と評している。

36 照子の回想録には「大正天皇、今上陛下の御大典の際、2回とも参列の光榮にあずかった両親と洵兄、建兄の京都の土産はやはり人形で…。」（東1986：124）とあり、洵も同行したことが分かるが、良はどうしていたかは記録にない。

るであろうが、それでも幼児が2人いたわけで、良は、書き物が好きであった姑脚に近づこうとしていたのであろうか。

健次郎は、その後も枢密顧問官、武蔵高等学校校長³⁷などを歴任し、昭和6年(1931)6月26日に死去する。健次郎が亡くなる前後のことは、『男爵山川先生傳』に詳しい。重篤の報に、枕元には洵と良、次女佐代子と夫寺野寛二(九州帝国大学教授)、三女照子と夫東龍太郎、四男建夫人(建は外遊中)、大山柏³⁸らが詰め寄り、健次郎の旅立ちを見送った(花見編1939:465)。脚が亡くなり、良が山川家の家事を取り仕切るようになってから15年目のことであった。

6. 良の夫と子どもたち・親戚関係について

良の夫洵は、東京帝国大学農科大学農芸化学科卒業、同大学院中退、工兵少尉³⁹であり、大正11年(1922)より東京帝国大学農学部講師を水産講習所教授と兼任し、翌年に博士号を取得、同大教授に就任した。健次郎と同じく研究者、教育者であった。(写真3・4)

洵の動向⁴⁰をみると、実に出張が多くあった。前述したが、結婚後に、4年間のアメリカ留学も経験している。夫不在で子どもたちの教育をしていたのは、家庭を守る良であったであろうし、洵の活躍には良の支えがあった。

例えば、良について「母堂なきあと、山川男爵家のホステスとして、才色兼備の令名高い夫人には、急ぎの書類を届けた時など、ビールでねぎらっていただいたり、山川総長の在世中は華族会館(霞山会館)で開かれたという門下生のための忘年会にお宅へ招かれたりして、お世話になった」(紫水会編1960:57)との弟子の麓禎康⁴¹による回想がある。



写真3 山川洵(『東京大学農学部水産学科の五十年』53頁より転載)

写真4 山川良(健次郎次男憲の長男健浩の結婚式にて、鶴沢佳子氏所蔵)昭和30年代頃

37 武蔵高等学校校長の任期は、大正15年(1926)4月7日～昭和6年(1931)3月10日までであり、死の直前まで勤めていた。

38 1889～1969。陸軍少佐、考古学者。健次郎の甥、五女捨松と大山巖(陸軍大将)の次男。

39 洵は、一年志願兵として体格検査に望んだが、近視眼のため不合格となった。健次郎は検査官に強いて再検査を要請、結果工兵に合格となった。兵役は学生に不利益という意見があるなか、健次郎は尚武主義で、男子たるもの必ず服役するべきと考えていた(花見編1939:480)。

40 これまで洵について学歴や職歴程度しか知られていなかったため、詳細な経歴や研究動向について『学苑』953号(2020年3月号)に報告した。

41 生没年や詳しい経歴は不明である。麓もまた学術論文を残しており、1970年代は神戸大学教育学部の所属が確認され、1980年代は市邨学園大学(現名古屋経済大学)の『自然科学研究会会

また、調査に出発するときは、「先生は列車が出る一時間以上前から東京駅に来られるので、お供の方が遅れて恥をかいた。そこには夫人が令嬢をつれて必ず見送りに見えた」（紫水会編1960：55）とあった。出張に出かける前の洵と家族との日常の一場面が浮かび上がる。

ところで五女艶子氏は「私の父も大学の先生をしております、…堅い職業に携わる本当に真面目な人でした。」と回想し、そして「母がとても感謝していたのは、祖父が嫁である私の母に対してほんとうに良くたててくれたことです。…母は嫁として一度も嫌な思いをしたことがないし、ありがたかったということをいつでも言うておりました」（山川健次郎顕彰会編2018：8～12）と語っている。

健次郎はどうしても付き合い以外は宴会にはほとんど出なかったというが、家庭での晩酌は好きであった。いつも決まって2合、冷酒は飲まず、火鉢に鍋をかけて燗をしており、鉦の死後、良は健次郎の晩御飯の時はいつも傍に座り、相手をしていた。良は「お酒がのめない家」から嫁にきたので、奈良漬で顔を赤くしていたようであるが、健次郎から舐めるくらいのお酒を寄こされ、少し呑めるようになった（山川健次郎顕彰会編2018：9～13）とある。

良が嫁いってから、実家である梶井家とのつながりはどうであったのか。『山川健次郎日記』の大正3年（1914）1月4日の来客の記録に「梶井氏」（尚友倶楽部編2014：44）とある。お正月の挨拶などでの付き合いはあったと思われるが、三木邦夫氏によると、「実家に帰省できたのは、一年に1回か2回あるかないかで、それもお正月やお盆が終わってからであったろう」と聞いている。

それを裏付けるように、兄梶井剛は多くの随筆を残しているが、良のことが驚くほど登場しない。ただ1カ所だけ、随筆集『好日』にある山川健次郎の逸話に「私の妹が先生の長男の嫁である」とあり、健次郎を「挙借厳正で自ら畏敬の念を覚える人柄であった」（梶井1974：215）と書いているが、それ以上はなかった。

剛が亡くなると『梶井剛追想録』が刊行された⁴²が、剛の次女寿子⁴³の回想には、「父の妹である山川の叔母、正木の叔母からは「若い頃、らんぼうで口が悪く、いつまでも忘れられないようなにくまれ口を云われたものですよ」とよく聞かされた」（大来1977：515）とあった。寿子の回想には、祖母（千鶴、良の母）の話もあり、千鶴と剛の姉（長姉愛）で時々旅行に行っており、剛の妻（梯子）も同行したという思い出話があった。そこには「祖母、伯母と秋の山を楽しみに出かけた」（大来1977：517）としかないので、良は同行しなかったのであろう。

誌』に多くの投稿がみられる。

42 剛を偲んで、井深大や松下幸之助など総勢128名が寄稿する550頁に及ぶ追想録である。

43 生年は1921～?。大来佐武郎（1914～1993）に嫁いだ。大来は、通信省・外務省出身で所得倍増計画の策定に関わり、外務大臣（大平正芳内閣）を勤めた。

このような良は、山川家の親戚関係の世話に暇はなかった。例えば、昭和13年（1938）3月に甥にあたる桜井懋⁴⁴が福岡から東京へ転居することになり、住むところとして良の長兄貞吉の旧宅が空いていたので仮住居として提供する段取りをしたり、懋の就職を二兄剛に頼んだり（桜井1968）、良が甲斐甲斐しく世話を焼く記録が残る。

ちなみに、剛の妻梯子の妹節子は、東龍太郎の弟俊郎⁴⁵に嫁いでおり、照子の義理の妹となる。つまり、良にとっては、兄の妻の妹が、夫の妹の配偶者の弟と結婚したことになる。梶井家、山川家、そして東家が巡っての親戚関係であった。三木邦夫氏によると、晩年に至るまで良と照子はとても仲がよく、練馬区上石神井に屋敷を構えた照子は、池袋の山川邸によく遊びにきていたと聞いている。また、邦夫氏は大学4年生の時、良の二兄剛に会ったことや、剛の長男健一氏にパリで会った記憶がある。良を通しての梶井家との繋がりはあった。

ところで、良と洵の間の5人の娘はとても仲がよく、よく集まっておしゃべりをしてきた。5人とも専業主婦であった。長女光子は福田仁志（1906～2001、和歌山県出身、東京帝国大学農学部農学科農業土木専修教授）に嫁ぎ、3男1女に恵まれた。曲がったことが嫌いな長姉で、きょうだいに男子がいなかったのも、とても責任感が強かったと邦夫氏は回想している。

次女英子は渡辺武（1906～2010、東京都出身、大蔵省財務官、初代アジア開発銀行総裁）⁴⁶に嫁いだ。3男2女に恵まれ、長くアメリカ・ワシントンで過ごした。昭和30年代、当時は珍しい8ミリカメラで子どもを撮影していたようで、子女の多くは現在もアメリカで暮らす⁴⁷。三女教子氏は、前述した三木忠夫に嫁いだ。四女復子は崎谷武男（大蔵

44 1887～1972年、北海道根室市生まれ。北海道師範学校卒業。小学校教師を経て、大正5年（1916）に健次郎の世話で明治紡績合資会社（福岡県戸畑市）に就職した。大正7年（1918）にまゆみ檀（会津出身飯沼閼弥娘）と結婚、2女に恵まれた。福岡で20年以上過ごしていたが、子どもの教育のため上京に至った（桜井1968）。

45 1898～1987。医師であり、順天堂大教授体育学部長を勤めた。ボート選手として、ロサンゼルスオリンピックに選手として、ベルリンオリンピックには監督として参加、JOC委員も務めた。兄の龍太郎同様、スポーツ医学を推進した。

46 渡辺家は諏訪出身で、子爵渡辺国武が武の祖父にあたる。国武は伊藤博文内閣の大蔵大臣・逓信大臣を務めた。国武の兄は伯爵渡辺千秋で宮内大臣を務め、千秋の次男千春は日本銀行勤務、妻は大山巖（後妻は捨松）の四女留子（前妻の子）であった。千秋の三男千冬が国武の養子となり司法大臣を歴任、その長男が武、次男が慧（物理学者）である。千春と留子の長男昭は昭和天皇の御学友であり、昭の長男允は上皇の侍従長を務めたことで知られる。

47 健次郎の玄孫にあたるタケシ・ワタナベ（渡辺健、1975年生まれ）はアメリカで生まれ、イエール大学を卒業、コネチカット・カレッジの助教授で日本文学を教えている。イエール大学資料室で健次郎の痕跡調査をしたところ、健次郎が名誉博士号授与を断る手紙（1909年）が残っていたという。手紙には、日本の真実の現状をアメリカの知識階級に紹介したいと書いてあり、当時日本の現状を理解してくれようとする人が少なかったことを指摘し「健次郎がやり

省勤務)に嫁ぎ、4男1女に恵まれた⁴⁸。五女艶子氏は服部誠太郎(大蔵省勤務)に嫁ぎ、1女に恵まれた。邦夫氏にとって、元気のよい上品な叔母様であり、夫の死後に昭和57(1982)～平成19年(2007)まで宮内庁御用掛を勤めた(山川健次郎顕彰会2018:20)。実に、良は18人の孫に恵まれた。

7. おわりにー結びに代えてー

洵は、戦時中である昭和18年(1943)に亡くなった。61歳であった。三木邦夫氏は、祖母である良から「夫は戦争の結果を知らないで良かった」と聞いている。健次郎の男爵山川家は、洵の死後、爵位を返上した。良は男子が欲しかったと言っていたらしいが、「五女艶子氏が、良に娘ばかりで良かったねと言っていた」という邦夫氏の逸話が筆者に印象的であった。

晩年の良は、昭和14年(1939)に池袋から引っ越した板橋(現練馬区)⁴⁹にて、三木家の家族に囲まれ、毎日、本や新聞を熱心に読んでいたり、源氏物語の内容はけしからんと話す姿があったり、真面目でかつ道徳心があった。邦夫氏は、良を正義と規律を重んじる人であったと語る。良自身は、健次郎が家族にも礼儀正しくしており、いかに素晴らしかったか、健次郎の曾孫にあたる邦夫氏に伝えており、また邦夫氏が会うことが叶わなかった祖父洵についても礼儀正しい人であったと伝え聞いている。ビジネスの世界で生きていた邦夫氏は、事ある場面で会津の血が流れていると認識する⁵⁰という。

昭和44年(1969)4月、東龍太郎と照子の金婚式が行われたが、「良子姉上は入院中」(東1986:10)とあった。この数年後、良は昭和47年(1972)、82歳で亡くなった。

さて、結びである。健次郎は、或る人が「旧会津」と「新会津」を区別していることに触れ、「旧会津に対して「人ごころ 會津の山の奥にこそ 都にしらぬ 花もこそさけ」

残したことをやらねばならないと、アメリカへ世界中から集まってくる留学生のために日本文化を知ってもらおう努力をする」(渡辺2014:42)と述べている。

48 次男宏明は慶応大学医学部を卒業し、東海大学病院長となった。肩関節外科医(世界における腱板不全断裂研究の先駆者)として知られる。

49 『会津会雑誌』54号(昭和14年6月刊、会津会)の会員転居者に山川洵の名がある。

50 邦夫氏は、昭和45年(1970)、伊藤忠商事に入社し、バグダット、カイロ、アブダビ、パリ、香港などに駐在し、韓国伊藤忠商事社長を歴任、国際的に活躍した。邦夫氏は平成21年(2009)より3年間、伊藤忠商事のイントラネットにある「コンプライアンス雑感」の記事を毎週担当した。そのなかに戊辰戦争(白虎隊、二本松藩、奥羽越列藩同盟など)の話、仕の掟について、会津藩家老西郷頼母の自決した家族について、大山捨松のバザーの話などの逸話が盛り込まれた内容がある。例えば、架空出張や経費の水増し請求などによる交際費の捻出などがあった場合の言い訳や甘えの構造について、「ならぬものはならぬ」という会津藩士の子弟への教育方針である「仕の掟」を紹介している。仕の掟を「人間としての心構えを説いた項はいつの世にも通じる内容」とし、いつも心のどこかで会津に心を寄せる姿があった。

と歌って称美され候儀に候ひしが、新會津に対し候ては、同様の賛辞を提供し得べく候哉、一と憤発を要し候事。」(會津會編 1912: 5) と発言している。旧会津は藩政時代を知るもの、新会津は近代以降に生まれたものを指すのか、もしくは旧会津は会津に残ったものの、新会津は上京したものを指しているかと思われる。

健次郎にとって、故郷会津を離れ、東京での生活が長くなればなるほど、子女や孫たちのような「新会津」が増えていくのは歴然であった。それを憂慮した健次郎は、長男の妻である良に「御話」として、旧会津の精神を伝えたのであろう。家庭に在る健次郎に一番身近に接した良はそれを受け止め、子女や孫たちにしっかりと健次郎の願いを伝えたことは、良の孫、曾孫に至るまで、会津へ誇りを持っている人々が多いことから推察できるのである。

陸軍軍医の父のもとに生まれ、日本各地を転々とする少女時代を送った良は、山川家の長男の妻として、規律のある厳格な一族の奥を守り、男爵家の模範となった。舅としての山川健次郎の日常を知る唯一の人物であった。良は、一生懸命に会津藩の士風や歴史を理解しようとし、舅の苦勞した少年時代をなぞり、嫁ぎ先の親戚関係を分かりやすく図解し、更に教養深く古代中国や和歌の嗜みに至るまで筆写していた。どのような内容でも健次郎の意志を残さなくてはと、良が筆を走らせた思いが偲ばれる。

筆者は、かつて北海道に形成された琴似兵村⁵¹に移住した旧会津藩士の動向調査にて「無形の家督」⁵²について述べたことがあった(遠藤2008: 108~109)。北海道に移住した会津藩士同様に、東京で過ごした会津藩士もまた、故郷への帰属意識を持ち、それを一族の帰属意識として、近代以降も過ごしていた。良をめぐる記録を辿ると、近代教育の振興に奮励し、皇室に接点をもって活躍した山川健次郎が、家庭では近代以前の会津藩や戊辰戦争のことを嫁に事細かに語っている姿が明らかになり、嫁である良もまた悪しからず「新会津」としてそれを実直に受け止めた姿が浮き彫りになったといえる。そして、健次郎の一族は現在に至るまで、先祖が律した精神を持ち続けることを志していた。本論文もまた、「無形の家督」を証明する一考察になったであろうか。

今後の課題として、『會津雜記』の内容を詳細に分析する。また他稿にて、本論文で紹介しきれなかった梶井剛・山川戈登・桜井懋の関係について明らかにする予定である。

51 明治8年(1875)に東北地方出身者のみの屯田兵村として、240戸の屯田兵が入植した。会津藩士は「斗藩士(青森県)」として、57戸が入植した。屯田兵村には琴似神社が創立されたが、のちに祭神に土津靈神(会津藩祖保科正之)が祀られた。

52 柳田國男は「しばしば滅失の危険にさらされる有形の財産よりも、むしろかほどまでに親密であった先祖と子孫の者との間の交感を、できるだけ具体的に知っているほうが、どのくらいの家系の永続に役立つか知れない。」(柳田1990: 34~35) といっている。

【付記】

本論文を作成するにあたり、鷗沢佳子氏（桜井ミワ曾孫）、梶井英二氏（梶井恒曾孫）、田沼幹子氏（会津会事務局）、古川富弘氏（会津若松市）、三木邦夫氏（山川健次郎曾孫）、山岸良二氏（元東邦大学付属東邦中高校教諭）（50音順）に大変御世話になりました。

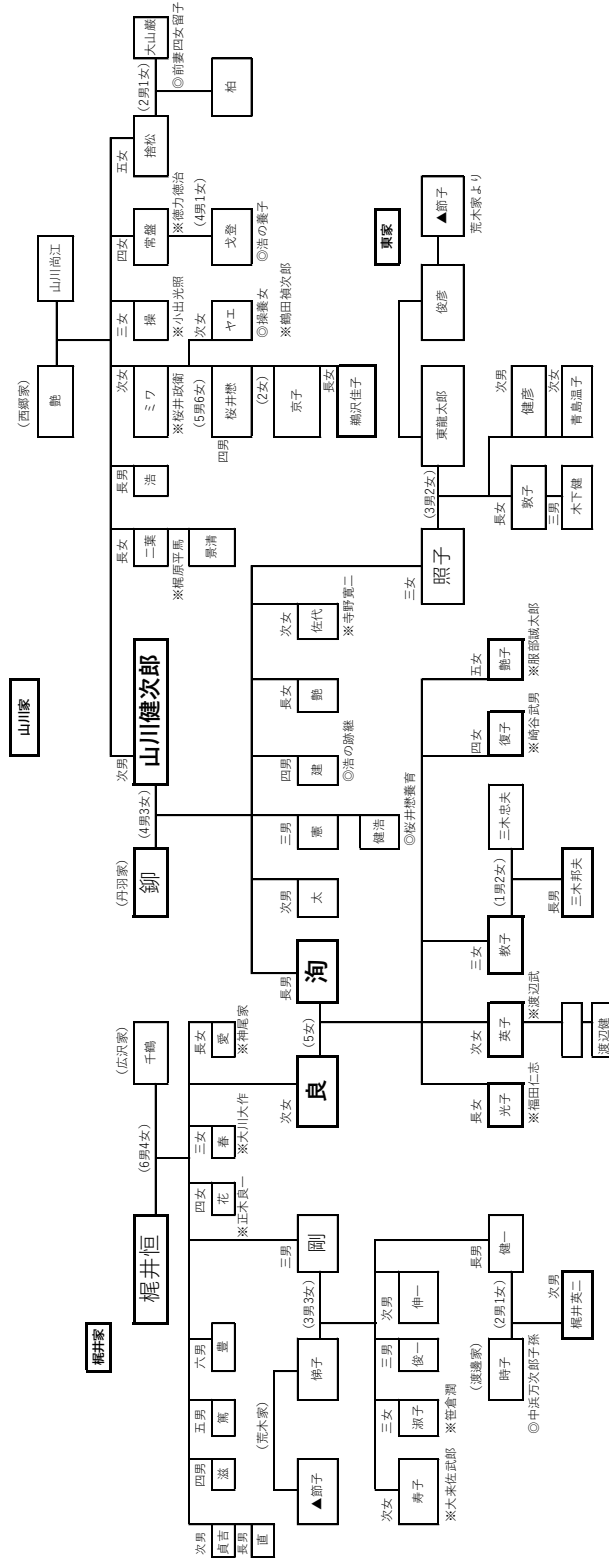
記して御礼申し上げます。

尚、本論文は敬称を省略したが、存命中の方は氏の敬称をつけて示した。

【引用文献】

- 会津會編 1912、1931、1932『會津會々報』第1号、第39号、第40号 會津會。
- 東照子 1986『吾亦紅』（私家版）。
- 今田二郎 1986『続山川浩將軍を偲ぶ－嗣子戈登さんとゴールドン將軍』『会津史談』60号、63～73頁。
- 遠藤由紀子 2008『近代開拓村と神社－旧会津藩士及び屯田兵の帰属意識の変遷－』御茶の水書房。
- 大来寿子 1977『大森のことなど』『梶井剛追想録』梶井剛追悼事業委員会（電気通信協会、私家版）。
- 小笠原長生 1933『偉人天才を語る』実業之日本社。
- 外務省 1941「大陸魚類ノ化学的研究事業助成」『研究助成関係雑件』第八卷 外務省外交史料館。
- 梶井英二氏所蔵資料「梶井家の系譜」「梶井家の歴史」「梶井恒略歴」（私家版）。
- 梶井剛 1962『一隅を照らすもの』（凸版印刷、私家版）。
- 梶井剛 1968『わが半生』（凸版印刷、通信タイムス社、私家版）。
- 梶井剛 1974『好日』梶井剛先生米寿記念事業委員会（電気通信協会、私家版）。
- 桜井懋 1968「吾が家の記録と吾がたどった道」（私家版、原本を筆者翻刻）。
- 紫水会編 1960『東京大学農学部水産学科の五十年』東京大学農学部水産学科創立五十周年記念会（麓禎康「山川洵先生の思い出」53～57頁）。
- 尚友俱樂部編 2014『山川健次郎日記－印刷原稿第一～第三、第十五－』芙蓉書房出版。
- 帝国秘密探偵社 1930『大衆人事録』第3版 帝国秘密探偵社。
- 東京慈恵会医科大学編 1965『高木兼寛伝』東京慈恵会医科大学創立八十五年記念事業委員会。
- 沼波瓊音 1926『大津事件の烈女畠山勇子』斯文書院。
- 花見朔巳編 1939『男爵山川先生傳』三秀舎。
- 山川健次郎 1937『男爵山川先生遺稿』故山川男爵記念会。
- 山川健次郎顕彰会編 2018『山川健次郎を語り継ぐ鼎談－家庭人としての素顔とエピソード－』山川健次郎顕彰会。
- 山川良『會津雜記』（私家版、製本年不詳）。
- 渡辺健 2014「米国における山川健次郎の足跡を追って」『山川健次郎と藤田哲也～工学教育の先駆者と竜巻研究の開拓者～』北九州産業技術保存継承センター。
- 柳田國男 1990「先祖の話」『柳田國男全集』13巻 筑摩書房 7～210頁。

(家系図)



(著者作成) 藤沢佳子氏、櫻井英二氏、三木邦夫氏よりの聞き取りより
 ※は縁き先、◎は同一人物、▲は同一人物、◆主に本論文に登場する人物を中心に家系図を作成した。